アイデンティティは作られるもの

LI校　高等部一年一組

多喜　ソフィア

父はドイツ人とポーランド人のハーフですが、私は自分を日系アメリカ人だと思っています。アジア系アメリカ人というタイトルを貼るのは、日本人との付き合いが長かったからでしょうね。私は日本語を流暢に話し、複雑な文化に溶け込もうとしています。自分のバックグラウンドが、現代のアメリカでは偶像化されているものであり、名前を聞いたことのあるキャラクターが登場するアニメやマンガで栄えていることに尊さを感じています。しかし、私は「純血」のアジア人ではありませんし、私自身にも厄介な障害があります。私は全くアジア人には見えません。大胆な茶色のアーモンド色の目と、太陽の下で金色に輝く茶色の髪を持っているので、私は白人のように見えるのです。それでも、私は「私は日本人です」

苛立ちを隠しながら、鼻で笑い返す。これが人種差別の一例であるかどうかは確かに議論の余地がありますが、食品のラベル付けやある文化の料理に対する非難に描かれているように、食べ物はデリケートな話題であり、時にステレオタイプであることは事実です。私はただのアメリカ人ではなく、アジア系アメリカ人であり、料理を通して自分のアイデンティティの半分を融合させています。文化とは結局のところ包括的な言葉であり、食べ物や料理は、この傘の基礎となる主要な枝の一部です。

歴史もまた、文化の基礎となる要素です。私は自分の人種的アイデンティティから逃げてきました。なぜなら、日本人であることがすべて肯定的なものではなかったからです。小学校二年生のとき、クラスメートと一緒に第二次世界大戦と真珠湾爆撃について紹介されるときが来ました。LEDライトが消え、スマートボードの光が薄暗い部屋を照らしていまとつぶやきます。民族を問われたときにも同じ言葉が口をついて出てきます。自分のイメージは自分で作る。実際、人種のアイデンティティは、身体的特徴や髪型に集約されるものではありません。

アジア人というパッケージには、ありふれたステレオタイプが含まれていることは誰もが知っています。「アジア人は車の運転ができない」「アジア人は数学が得意」など、人種的なステレオタイプは枚挙にいとまがありません。私も、自分が日本人であることや、学校に手作りのお弁当を持っていくことなどで、これらのステレオタイプの犠牲になったことがあります。人々の視線は私の弁当に注がれ、顔を上げて会話を始めることさえ怖い。

「それってお寿司？」

ある女の子が私の肩越しに、まるで料理評論家のように私の弁当を見ています。

「いや、おにぎりだよ。」

私は、米や海藻を「寿司」と呼ぶ人たちへのした。先生がパールハーバーの原因と犠牲者について説明している間、私は自分の名前が出てくるのではないかという恐怖で唾液を飲み込んでいた。すると、隣に座っていた男の子が私に声を掛けました。

「ソフィアって日本人だよね。」

憧れの言葉が頭の中で反響し、不安と恐怖の炎を燃やしていたのです。私はその日、日米戦争の加害者として定義された日本人であることを屈辱的に感じ、涙を流しました。今でもこの日を振り返ると、日本人であることでダメージを受けた過去の自分が恥ずかしくなり、ドラマの中心にいた自分が愚かであったことを認めています。私は、人種や民族を個人の特性よりも優先させることは間違っていること、そして、これらのタイトルから逃げても、人々がこのタイトルについて無知なままではなく、これらの特性を受け入れるように戻るのであれば問題ないことを学びました。私が泣いた理由は、民族的な不安を取り

除くためだったのかもしれません。それでも、過去の自分を見て自分を嫌うのは間違っていると思います。もしかしたら、私にとって涙は良いもので、私の目は体にこびりついた不安を洗い流すための日課となっているかもしれません。

多種多様な人種が共存するニューヨークで過ごしてきた私は、人種にまつわるさまざまな出来事に遭遇してきましたが、それは受け入れるべきものであり、自分を貶めるものでもありました。私は日本人であるという経歴の半分にしか注目していませんでしたが、ポーランド系ドイツ人であることを受け入れた例はあまりありませんでした。今日、誰かに自分のアイデンティティについて聞かれたら、私はこう答えます。

「アメリカ味のパイ生地を想像してみて。そして、日本味が半分、ポーランド味とドイツ味が四分の一ずつ入っているパイの中身を想像すると、私の出来上がり。」

ワクチン格差とコロナの終息

LI校　中等部二年一組

髙橋　勇登

二十一世紀、僕達は格差社会の中で生きている。経済格差、情報格差、教育格差、健康格差など、ありとあらゆる格差が社会問題になっている。そして今、最も深刻な格差の一つが、ワクチン格差だ。

新型コロナウイルスに対抗できるワクチンが開発されてから、もうすぐ一年になる。今やワクチンは、パンデミックを終息させるために必要不可欠だと言ってもいいだろう。僕もワクチンを接種してからは、前よりも安心して外出できるようになった。なぜなら、ワクチンを打つと、ウイルスの感染の成立を防ぐ中和抗体が体内にできて、もし感染しても重症化する確率が下がるからだ。アメリカ疾病予防管理センター（ＣＤＣ）によると、今年九月半ばの時点で、全米の五十四パーセントがワクチン接種を終了している。また、接種が進んでいる州では、コロナ感染による死亡者数が減っていることも分かっている。

しかし、ワクチンは誰でも受けられるわけではない。発展途上国では、ワクチンの供給が不十分でコロナの感染が広がっている。世界保健機関（ＷＨＯ）は今年九月二日の記者会見で、アフリカでワクチン接種を終えたのは人口の三パーセントもいないと発表した。また、アフリカの五十四か国のうち四十二か国で、九月末までに人口の十パーセントの接種を終えるというＷＨＯの目標が達成できないことも明らかになった。

ワクチンの供給量とこれらの国の経済の弱さは関係している。つまり、国際社会の中で地位が低く権力がない後進国は、国の予算が少なく、先進国に先立ってワクチンを買えないという厳しい現実に直面している。

アメリカや中国のように、ワクチンを自国で開発すれば、他国との買い占め競争を逃れられて、ワクチンを確保できる。しかし、ワクチンの接種が進んでいないほとんどの国は、その医療の技術がない。そもそも小さい国には、それに投資する資金もない。

では、どうすればワクチン格差を解消できるのだろうか。例えば、アメリカ政府は、ＣＯＶＡＸというＷＨＯのプログラムに八千万のワクチンを寄付するという方針を出し、世界に協力する考えを示している。このように、十分な量のワクチンを保有する国が、経済的に貧しい国へ寄付する活動は、これからもっと必要になるだろう。

さらに、途上国にワクチンを供給できるように、ワクチンを開発した製薬会社と各国のＮＰＯ団体などがスクラムを組み、廉価でワクチンを提供できる取り組みをすればいいと僕は思う。そうすれば、ワクチンを必要としている国の人達にワクチンが届けられるし、製薬会社も社会に貢献する真摯な姿勢が世間に認められて企業イメージが良くなり、お互いがウィン・ウィンの関係になるのではない

か。

　完成までに何年もかかると言われていたワクチンが、科学者達の不眠不休の努力によって驚くほどのスピードで開発された。しかし、ワクチンが出来てからおよそ一年後の今も、まだパンデミックは続いている。ワクチンが余っている国では、三回目のブースターショットが予定されているが、ワクチンが足りていない国では、ほとんどワクチンが出回っておらず、ワクチン格差はますます広がる一方だ。

　コロナウイルスの恐怖におびえながら暮らしたい人なんて、世界中のどこにもいない。ワクチン格差は決して遠い国の話ではなく、僕達の生活にも影響する深刻な問題だ。ワクチン格差を無くせば、世界規模で多くの命を守れるし、コロナとの闘いを早く終わらせることができる。パンデミックを終息させるには、世界が協力して途上国へのワクチン供給を支援して、これ以上ウイルスが変異して感染が拡大しないようにすることが重要だと思う。


名前について

L工校初等部六年一組

金　太悟

ぼくの名前は「太悟」。韓国の漢字の読み方で「テオ」と読む。ぼくのお父さんのお父さん、すなわちおじいちゃん（ハラボジ）がつけてくれた名前だ。ぼくのおばあちゃん（ハルモニ）はベルギー人なのだけれども、ヨーロッパではさ。は「テオ」と発音する。韓国でもヨーロッパでも日本でも「テオ」と呼んでもらえるように考えてくれた名前だ。でも名前に使われた漢字の意味を教えてもらった時、何だかとても大変な名前をもらってしまったような気がした。

「悟る。それも太く。ハラボジはぼくにしっかりと悟る人になってほしいと願ってつけてくれたんだ。

ハラボジの期待を裏切ってはいけない。ぼくはそう思って、今までぼくが悟ったと思うことをノートに書き出してみた。

20×20


一、甘いものを食べて歯みがきをしないと虫歯になると言われていたのに、歯みがきをさぼった。だから虫歯になった。

二、宿題を後回しにすると、後から大変になるよと言われたのに、後回しにした。やっぱり後から大変になった。

三、夜は早く寝ないと、次の日の朝起きるのが辛いよと言われたのに、夜ふかしをした。次の日起きるのが本当に大変だった。

ここまで書いて悟ったこと。

「お母さんやお父さんに、やめなさいと言われたことをし続けていると、自分にとってよくないことが起こる。」

ぼくは正直、この悟りにあまり納得していないのだけれども、心の中でハラボジがにっこり笑ったような気がした。太い悟りにはまだまだ遠いかもしれない。だけどぼくの名前は「太悟」。これからも、長い長い悟りの道を歩んでいく。

20×20

ホエールウォッチング

L工校初等部二年一組

ガブリー二　二コラス

去年の七月十七日、母のおたん生日に、ぼくは、母、いとこのソル、ソルの母まりちゃん、ソルの父のロブと、ブルックリンから船にのり、沖に出ました。青空の下で、ニューブルーの海が、白いなみを作っていました。しばらくすると、大きなザ

12×12

ッと魚をのみこみました。船長は、クジラを見つけるたびに、「三時の方向でクジラ発見!!」「六時の方向で出た!!」と、アナウンスして、そのたびにみんなで甲板を走り回りました。船がグラグラゆれて、おかしかったです。

ぼくは、動物が大好きなので、野生のザトウクジラに会えて、とってもうれし

12×12

トウクジラが、ザブンと、とつぜんあらわれました。そのクジラが、ジャンプした時、巨大なしっぽが見えました。ぼくは、そのはく力に、本とうにおどろきました。

また船がすすみ、今度は別のザトウクジラが、魚のむれに向かって、大きな口を開け、しぶき上げて水面にとびだして来て、ガバ

12×12

が「たです。いつも、時間がある時に、色いろな生き物の生息地やエサ、ぜつめつのききにあるかなどを調べています。

ザトウクジラは昔、ほげいにより数がへっていましたが、二千十八年から、またふえてきています。

ぼくは、一人一人がルールを守り、毎日の生活に気をつけるだけで、空気や海

12×12



異文化交流

W校　高等部二年一組
井澤　幸平

異文化交流とは単語通り、異文化に触れるという行為であり、その定義は人により異なるかも知れない。自分にとっての異文化が他人にとっての異文化ではないかも知れないしその他人にとっての異文化が自分の異文化でないかも知れない。しかし、異文化に触れることでその人の何かが変わるはずだ。

二〇二一年の夏、僕はまさしくその異文化交流を体験しました。日本へ一ヶ月間ほど一時帰国していた期間、僕はトリプレッタという日本のサッカーチームに所属していました。普段はアメリカでサッカーをしている僕からすれば、日本でのサッカーは異文化であり、アメリカのサッカーと比べて多くの違いを発見しました。

まず最も違いを感じたのは気温と湿度です。アメリカでのサッカーは基本最高三〇度の気温の中サッカーをしますが、日本では三〇度前半は日常であり、３０度後半もありました。その上日本では湿気がアメリカよりあるのでジメジメした中サッカーをやります。日本のコンディションの中では体力は大量に蝕まれ、簡単に熱中症を起こす可能性があります。初めは僕もこの日本の過酷な環境の中でサッカーをするのに苦しみ、簡単に体力切れでバテていました。このような環境でプレーを重ねているトリプレッタの選手は膨大な体力や忍耐力を身につけ、過酷な環境でも負けないメンタリティーを身につけたんだと感じました。この大きな環境の違いは運動をするには致命的ともいえる差であり、環境の違いを強く意識しました。

次に発見した違いは移動手段の違いです。アメリカでは基本車で移動できますが、これは土地が広いが故のアメリカで可能な移動手段なのです。アメリカと比べて土地の狭い日本では車は非効率であり、電車での移動が主です。例え目的地のグラウンドが隣町にあったとしても、電車の乗り換えなどを含め、車で一五分以内のところ、三〇分以上かかる可能性があります。この電車での移動は僕にとっては新鮮な体験であり、日本での移動の大変さを体感しました。この移動の過程で迷子になることは多くありましたが、それさえも楽しく感じ、グラウンドまでの移動を辛く感じませんでした。新宿駅や渋谷駅のような広い駅での乗り換えや、電車からバスへの乗り換えなどの複雑な移動が多くありましたが、アメリカでは体験できない経験ができました。

最後の違いはプレースタイルの違いです。アメリカはプレイヤーの大きな体を重視したフィジカルなゲームが主ですが、日本人は体が小さい分、個々の技術を優先したメンタルゲームが主です。戦術・パスワークや足元の技術が発達したようなゲームです。アメリカでサッカーをやって発見したのですが、アメリカではボールを相手から奪う時、相手の選手

を体でボールから押し出すようにするのですが、日本では体をボールと相手の間に入れるようです。また、コーナーキックやゴール前では、アメリカでは相手の前に位置し、ボールが来たら対応するのですが、日本では相手の前に位置し、手を使い相手を押してからボールの対応をします。このような個人的な違いだけではなく、チームプレーとしての違いもあります。アメリカと比べ、日本はポジショニングがうまく、チーム全体の形が整っています。体格で劣っている日本人が海外の選手相手に渡り合えているのはこのような個人の技術やチームとしての力、サッカーのプレーに関するIQが発達しているからだと感じました。このような個人の技術やチームでの強みを身につけている彼らには強じんなメンタリティーと自信があるのだと確信しました。他の選手に比べて、身長も高く、体幹がしっかりしており、体格で優っている僕でしたが、フィールド上での勝負で劣るのはこのような面が足りないからだと実感しました。このようなチーム全体の形やプレースタイルの違いを感じたことで、自分のプレースタイルの幅が広がったと思います。

　多くの違いを発見した中、一番体感できたのは以上の気温と湿度、移動手段、そしてプレースタイルの違いです。こうした異文化交流を行い、様々な違いを体感することで、自分の視野を広げ、自分の経験値を増やし、新たな自分に出会うことができました。夏休みの一ヶ月で新たなチームメイトに出会い、トレーニングメニューをこなし、アドバイスをもらい、彼らと交流を深めて、サッカー選手としても人間としても成長できた気がします。

旅立ちの試練

W校　中等部三年一組
岩﨑　莉奈

「絶対引っ越したくない。」

　二〇二一年二月。三月中旬に引っ越すことが決まったと、母から伝えられました。日本からアメリカへの引っ越し。私は、たくさんの試練と戦いました。

　時を戻すと、元々引っ越しは、二〇二〇年の予定でしたが、中学一年生を終える頃、コロナウイルスが流行し始め、引っ越しが三月に延期となりました。

「延期によって増えた大阪での時間を大切に過ごしたい。」

そう思った私は、ある決意をしました。

「大阪で過ごす、残りの時間を、大切に過ごし、積極的にいろいろなことに取り組み、想い出を創る。」

その後、私は、何事も

「もう最後か。」

じゃなく、音楽祭のリーダーを務めるなどして、

「最後だから、全力で！」

と、自然と前向きに考えられるようになり、友達とたくさんの想い出がつくれました。

　なので、覚悟はできていたつもりでしたが、いざ引っ越しの日が近づいてくるとなると、心の整理ができず、引っ越しに対する寂しさや不安な感情が芽生えてきて、体調をよく崩すようになってしまいました。しかも、私は、友達に、引っ越すことを言いたくてしょうがなかったのですが、二月末に、定期テストがあり、友達に伝えるのは、三月になってから、と決めました。来年の受験や修学旅行の話が普段の会話で話題に上がる中、私は、三年生では、もういないのに

「三年生に、みんなと一緒に進級する」

というていでみんなと話していて、罪悪感がとてもありました。引っ越しの不安に、友達に言えない辛さ。私の精神は、ボロボロでした。

「誰にも頼れない。」
そう思っていたとき、私を助けてくれたのは、学校や習い事の先生でした。真剣に相談に乗ってくれて、
「きっと友達は簡単にあなたの事を忘れないよ。」
「あなたはきっとアメリカでもうまくやっていけるよ。」
などと、たくさんの言葉をかけてもらい、私は、その一言一言に本当に救われました。
三月となり、私は、クラスメイトや部活の友達に、引っ越すことをついに打ち明けました。打ち明けた瞬間、ふとみんなの顔を見ると、仲のいい友達は、みんな涙を流しながら
「えっ!?ドッキリやんな?そう言ってや!」
と私に言ってきました。そんなみんなの様子をみて、心の中では、本当に嬉しかったです。
日本の学校に通うのも、後約一週間となった時、部活に行くと、部活の仲間から、
「今から演奏会やるで！」
と言われました。話が急すぎて、私はよく状況を理解してないまま、楽器を組み立て、音楽室へ向かうと、私の学年の先生たちがたくさん音楽室にいました。私が引っ越すことを伝えると、密かに、部員で演奏会を計画してくれていたそうです。この演奏会が、みんなの私に対する思いが込められていると思うと、感動で胸がいっぱいになりました。演奏会では、最後に、菅田将暉さんの「虹」を演奏しました。曲の歌詞と、今の自分の気持ちが重なって、涙がどんどん溢れてきました。最後の挨拶は、ほぼ泣きながらでしたが、私が話し終えると、たくさんの拍手に包まれました。余計に涙が溢れて止まりませんでした。
「吹奏楽部に入って、このメンバーで二年間活動できて良かったな。」
と心から思いました。私にとって、一生忘れられない演奏会となりました。
そして、ついに登校最終日。クラスメイトは、最終日であるのにも関わらず、いつも通りに、私に接してくれました。そのおかげで、私は最後まで”いつも通りの”学校生活を送ることができました。最後の終礼で、学級代表の人が、私に、みんなのメッセージがのっている色紙と、クラスの集合写真を渡してくれました。クラスのみんなの優しさが伝わってきて、嬉しくて、やはりまた泣いてしまいました。みんなからのメッセージを読んでいて、特に「リーダーの時、皆をまとめてくれてありがとう」などというメッセージが沢山書かれていて、その瞬間、自分の今までの行動を誇りに思うことができました。中学校の門をくぐる時、ちょっと寂しかったですが、この学校で、たくさんの想い出を創れたので、悔いは全く残らず、最後、もらった手紙や色紙など、たくさんの宝物を両手いっぱいに抱えて、笑顔で門をくぐることができました。
「私は、最高のクラスメイトや部活の仲間や先生方、そして友達がいる。」
引っ越すまでの一ヶ月で、何度もそう感じました。今回の引っ越しで、沢山悩んで、沢山の人に助けてもらって、今までの「当たり前」だと思っていた、何気ない日常の中に、たくさんの幸せがあったことに気づくことができました。そして、人の暖かさを、心から感じられました。今回の経験は、今後の私の人生においても、とても大切な経験となりました。この経験は、これから何か大きな壁にぶつかった時、きっと私を助けてくれるはずです。

僕にとっての補習校

W校　初等部　六年一組
梅田　誠一朗

なぜぼくは補習校をやめなかったと思いますか。それは僕にとって補習校はいつでも日本に帰れるために準備する場所だからです。

僕は元々字を書くことが苦手です。今年は僕の四年目の補習校になります。補習校の漢字の宿題が難しくて、毎週ある漢字テストでは、僕はいつも半分ぐらいしか出来ませんでした。それに補習校は毎週宿題がたくさん出ます。それがとても大変で、たまに補習校をやめたいと思うこともありました。しかし、僕はいつか日本に帰りたいと思っています。なぜなら日本の食べ物は美味しいし、家の近くに児童館があるからです。そのため、お父さんから

「いつでも補習校をやめて良いぞ」

と言われましたが、僕は自分の意思で続けていきました。

三年生の時もまだ漢字テストの点数が悪く、皆に置いて行かれていました。ある日、先生がみんなに

「次の漢字テスト絶対に百点取ってください」

と言いました。この時なぜかこの「絶対」という言葉が僕の心に強く響きました。そこで僕は漢字の勉強の仕方を変えました。それまでは漢字を書くだけで、宿題を早く終わらせることだけを目的にしていましたが、今回は覚えることに集中するようにしました。具体的には、ノートに漢字を教科書から写さずに、覚えるまでくり返し書きました。

次の日は漢字テストでした。僕は昨日の勉強が役に立っているのか心配でした。そして漢字テストが始まりました。するといつもと書いている感覚が違いました。いつもは考えながら書いていましたが、今回はスラスラと何も考えずに、ただふり仮名を見るだけで、すぐに書くことが出来ました。二週間後、テストの結果の表が張り出されました。その表はいつも点数の良い人だけ名前がのります。そこに僕の名前が初めてのっていました。それを見た僕は、いっしゅん、心臓が止まったように感じました。僕が一番苦手な漢字が百点だったということが僕には信じられませんでした。お父さんもお母さんも先生も凄く喜んでいました。このたった一つの百点が僕に勇気を与えてくれました。

それから僕は算数や国語などの、他の教科も前よりも良い点数が取れるようになりました。今は前よりももっと漢字を覚えるのが早くなり、宿題でも困ったりすることが前よりも少なくなりました。補習校で僕は国語や算数が凄く上達しました。何より僕は補習校から自信をもらいました。僕は補習校をやめなくて本当に良かったと思っています。


ハローアメリカ
W校小学部三年三組
宮井　直央
「うそでしょ。」
一年前、お父さんから
「ニューヨークに引っこすよ。」
と言われた。ぼくは、きょとんとしてしまった。頭の中が真っ白になった。友だちがいなくなる、かんたんに人と話せなくなる、お花見ができなくなる、日本のお菓子が食べられなくなる、さびしくなる。
だから、アメリカに行きたくなかったんだ。でも、お父さんが
「どうしても家族全員で行きたいんだ。」と言ってきた。

ぼくは、これがゆめの話かと思った。

引っこす事を、なかよしの友だちにつたえた。ぼくと同じくきょとんとした顔をしていた。

「遠いね。」

「日本に帰って来たら、サッカーしようね。」と言ってくれた。

ぼくは、本当に引っこすんだと実感した。

毎日、ランドセルで通った道も、ベイスターズカレーのきゅう食も、勉強がたいくつだった教室も、ケイドロした校庭も、アメリカに来てから、なつかしいな

「もっと大切にすごせばよかった

16×16

こっちに来て、はじめておいしい空気をすい、リラックス出来た。

これから、ぼくがー番がんばりたい事は、えい語を話せるようになりたい。

友だちや先生とえい語で会話をしてみたい。

そしたら、ぼくは日本語を教えてあげるんだ。

16×16

な」と思った。

「ドキドキしていた」。

マンハッタンに着いてクラクションの大きさにおどろいて、町のきたなさに、がっかりした。

「お父さんのうそつき」。

と思って顔を見たら、ぼくよりざんねんでつかれた様子だった。

ぼくは、お父さんに何も言えなくなった。

週まつに、ニュージャージー州テナフライに住んでいる友だち家族の家に遊びに行った。大きな家に、公園みたいな庭、かわいい犬がいた。

そこは、まるでぼくのゆめ見ていたアメリカ生活があった。

16×16